様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０２６８２

研究課題名（和文）教師教育における美的教育プログラム―協同表現の教育の授業構成―

研究課題名（英文）Aesthetic Education in Teacher Education:Designing the Classwork within the Cooperative Expression

研究代表者
桂　直美（Katsura, Naomi）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：５０２２５６０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教員養成課程の大学生に「美的教育」プログラムを実践することを通して、教師としての成長についてもたらされる意義を検討した。芸術の美的経験それ自体を協同表現・協同鑑賞の場で実現しようとする、グリーンの論考を授業構成に即して解釈し、授業に先立ってゴールとする教授目標を設定しない「オープンカリキュラム」の実践によって、学生自身の表現の目標が、活動の目標とともに生成する点にその意義を見出した。また、グリーンの思想がカリキュラム研究一般に及ぼした影響を検討し、協同表現と鑑識眼による相互批評が視点の多様性をもたらすことで表現の成長を促す教師教育に資する点を評価した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、授業に先立ってゴールとする教授目標を設定しないオープンカリキュラムの特徴を、学生の協同表現活動を中心とした芸術教育を範型とし、実践への応用の在り方を示した。またオープンカリキュラムの意義を、学生自身が表現の目標を活動の中で生成する点に見出し、自身の学びの道筋を自分のものと感じ主体的になっていくためには、目標が外部から予め措定されないことが重要であると示した。今日の教育における目標によるカリキュラム管理が、個の学びに関する主体的な決定の機会を失わせているのであれば、表現活動を通し学習者が自己の学びの生成に関与するカリキュラムの在り方を、芸術教育に限定せず拡げていくことが求められる。

研究成果の概要（英文）：　This study examines the significance of aesthetic education by Maxine Greene by implementing an “aesthetic education workshop” for university teacher education. Greene’s discussion, aiming to realize the aesthetic experience of art itself in a cooperative learning environment, was interpreted in terms of the class structure and organized into an “open curriculum” in which the goal of teaching is not set prior to class implementation. We clarified the aspects in which students’ own goals of expression are generated along with the goals of activities in the class practice of the “open curriculum.”
Examining the influence of Greene’s philosophy on curriculum research in general, it became clear that mutual appreciation and critique, through collaborative expression and discernment, contributed to teacher education by appreciating the diversity of viewpoints and thereby promoting the growth of individual independent expression.

研究分野：芸術教育学・教育方法学

キーワード：美的教育　教師教育　音楽教育　美術教育　鑑識眼　芸術批評

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

今日標準的とも言える、教授目標を明確に措定してそれを教育評価・学習評価の基礎に据える要求は、初等教育から高等教育にまで及ぶ。しかし、創造性と個がよって立つ個性的な視点を必須の要素とする芸術の教育においては、そうした授業構成論およびカリキュラム構成法は無力であるばかりか足枷ともなる。認知的・技能的な目標を明確にすることが必ずしも豊かな学びにつながっていかないという問題が、最も顕著に表面化するのが、創造的に新たな視野と表現を生み出そうとする芸術表現領域であり、多様な成員の協同を学びの源泉とする授業構成なのである。
「美的教育」とは、教科の枠組みを超えて、芸術の美的経験それ自体を教室という協同学習の場で実現しようとする、デューイとグリーンの芸術哲学に依拠する教育プログラムである。学校において主として「美術」や「音楽」といった教科教育によって担われてきた芸術教育は、従来の授業構成の枠組みでは、「教授目標」となる知識や技能によって授業過程が決定され所産が評価されるため、学習者の創造性、個別性を基盤とする学びの実現自体がむしろ難しかったと言わざるを得ない。不確実性や予想を超える経験を教育の内容としていくために、本研究では学習所産が前もって予定されない美的教育ワークショップの構成を援用し、授業とカリキュラム構成の原理的な次元での転換を図る。さらに、その教育実践を可能にする教師教育における独自の準備教育が不可欠となることから、本研究は、教員養成コースにおける大学生を対象とした「美的教育」プログラムをデザインし実践的に研究し、「美的教育」の授業実践のための大学教育レベルのプログラムの構成要件を明らかにし、教師教育におけるその意義を示そうとした。
芸術的表現の力を子どもの中に育くむという課題は、芸術の文化伝統における知識や蓄積された表現技術について指導することでは実現されない。子ども自身が実際に芸術における美的経験を、自身の表出に基づくクリエイティブな過程として経験し、その意味を実感することを通してでなくては達成できないのである。そのため「美的教育」では、生の芸術作品鑑賞に準ずる環境を授業空間に持ち込もうとし、また同時に学習者たちのアートの経験の多様性に教師が真正に応じることが要求される。美的経験は、表現主体にとって自分の個性的な生に統合されたホリスティックなものである故である。しかし、教師が多様な関心や異なる興味にただ応じるばかりであれば、そこで立ち上がるはずの協同表現は雲散霧消する。したがって、個々別々の個人的な興味に解消させずに協同の探究活動を立ち上げ芸術的表現に至る授業は、どのような契機を持って、いかに構成されるのかを明らかにすることが本研究の課題となる。

２．研究の目的

授業づくりにあたって次のような点を解明すべき課題とした。第一は、授業に先立って教授目標を決定せずに、授業を構成し学びを引き出すことがどのように可能になるのか。第二に、その実現のためには、教師にどのような力量と準備的経験が必要であるかという問題である。
（1）学習者と芸術作品と授業者とのオープンな出会いが「美的教育」のエッセンスであり、事前に教授目標を定めるような設計主義が退けられるのが「美的教育」ワークショップに顕著な特徴であるといえる。それゆえに、教授目標に代わって授業における探究の可能性を方向づけるものとして「探究の道筋」とよぶ一つの問いを設定する。この「探究の道筋」がどのように機能することで、より多くの問いを引き出すことができ、芸術的表現への探究を引き起こすことができるのか、さらにそうした多様な問いが林立する中で協同の探究を形作っていく契機を、授業者がどのように創出することができるのかを明らかにしなくてはならない。すなわち、学習者たちを方向付け協同の学びを形作るものは何であるのか、またそのためにこの初発の問いがどのように機能し発展するのかを、真正の「美的教育」の実践を分析することから明らかにする必要がある。
（2）従来教科教育では、教授目標を基準として知識や演奏技能・表現技能によって授業の経験や教材、評価の観点が決定される傾向にあった。このようなリニアなカリキュラム設計とは異なり、「美的教育」プログラムでは、教科の枠組みにとらわれないことに加え、美的経験それ自体を教室におけるワークショップ型共同学習の場で実現しようとするため、専ら教師の視点から見た事前の設計ができなくなる。また学習者には、馴染みのない芸術表現に対峙し、戸惑いや謎を含む、わからなさに直面しながら、自らの視野を開いていくことが課題とされる。したがってその授業実施のために、特に教師には既存の知識のみに依拠せず、授業者と学習者との関係性にも著しい変化を生み出すような知的柔軟性が求められる。それゆえに、授業を行う力量を育てる教師教育プログラムにも独特の困難と課題があると考えられるのである。

３．研究の方法

「タイラー原理」以来の教授目標を規準としたカリキュラム構成と評価というカリキュラム経営パラダイムから「美的教育ワークショップ」の場合はどのようにシフトすることができるのかを明確にするために、美的教育を提唱したマキシン・グリーンの「美的教育」に関する哲学的論考を授業構成に即して解釈し、授業実践における教師の働きに焦点をあてて、ワークショップ型カリキュラムの学びの構成要素を整理した。

結果（学習の到達点）を予見しないオープンカリキュラムであっても、教師が指導性を発揮することが重要である。授業者が目標や一つのゴールではなく、まだ見ぬ「可能性」に向かって授業を行うとはどのようなことであるのかを明らかにするため、自分個人の見方や問いを抱いて複数の授業者が共同で教員養成課程における授業実践に臨み、そのための教材構成やワークショップ形式の授業構成までをアクションリサーチにおいて省察することとした。授業者とアート作品との関係や、授業者と学習者の関係の変化についても省察対象とした。

2022 年 10 月から 12 月にかけて、コロンビア大学のアルサップ教授を招聘し、初等教育教員養成課程の学生に「美的教育プログラム」の 8 週連続の研究授業を、筆者と協同で実施した。学びのメルクマールとして、「問い」の生成のありかたを軸として授業過程を分析することとし、「問い」の生成につながる指導場面を取り出して、ミクロに分析をするため、補助として授業のビデオ記録を併用した。

４．研究成果

グリーンの「美的教育」をプロとタイプとした授業構成の中で、授業実施に先立ち教授目標を設定しない「オープンカリキュラム」の授業実践の中で、学生自身の表現の目標が、活動の目標とともに生成する様相を見ることができた。

アクションリサーチの過程においては、1）学生自身の文化の中から素材を見出すこと、2）馴染みのあるものについての新たな発見をしながらアートへの愛着を深めること、3）協同表現と鑑賞の活動を通して、視点の多様性を味わうことを、美的教育の要件として取り出すことができた。また、表現活動について各学生が表現者としての自己の成長に関する振り返りを行うことで、学習経験を言語化して俯瞰することができた。また自分たちの表現の相互鑑賞や、教師としてのスキャフォールディングの在り方への省察も組み入れることで、教育のプロセスについての理解を深めることにつながった。この点は、児童を対象とした美的教育にはない、教員養成課程における「美的教育」独自の成果でもある。

グリーンの思想がカリキュラム研究一般に及ぼした影響、およびそれについてのカリキュラム研究領域における評価について検討し、協同表現と鑑識眼による相互批評の中で、視点の多様性を味わうことを重視した結果、芸術の美的経験それ自体の実現は、協同学習の場でこそ効果的に目指すことができると考えられた。そこではまた、自己の表現の特質を理解すると同時に、他者との違いを承認することができ、表現することへの個人の心理的な敷居を取り去ることが示され、これら諸点が将来の教師を目指す段階での教育に資することが明らかとなった。協同での授業のプロセスと成果については、オスローで開催された「音楽教育哲学国際シンポジウム」でも発表し、その後刊行を目標として、共同研究者との協議を続けている。

本研究の社会的意義と今後の課題としては、教師の十分な指導性を発揮しながらも授業実施に先立ってゴールとする教授目標を設定しない「オープンカリキュラム」の授業実践の構成法を示し、学び手自身が表現の目標を生成する点にその意義を見出したことがある。自身の目標を生成し学びの道筋を方向づけ、主体的に選びとっていくことが、生徒の主体性を育むための重要な要件であるといえる。とりわけ授業者としての成長という点から、教員養成課程において学生自身がこうした主体性の感覚を獲得することは不可欠の経験であるといえよう。

自身の学びの道筋を自分のものと感じていくためには、目標が外部から予め措定されないことが重要であることが明らかとなった。今日の教育における目標によるカリキュラム管理が、個の学びに関する主体的な決定の機会を失わせているのであれば、表現活動をカリキュラムの中核に位置づけて、学習者が自己の学びの生成に関与するカリキュラムの在り方を芸術教育領域に限定せず拡げていくことが今後求められると言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 桂 直美	４．巻 88
２．論文標題 芸術批評が提起するカリキュラム構成の枠組み	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教育学研究	６．最初と最後の頁 419～431
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11555/kyoiku.88.3_419	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 桂直美	４．巻 -
２．論文標題 教育的価値	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本デューイ学会編『民主主義と教育の再創造』勁草書房	６．最初と最後の頁 292-294
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高井良健一、伊藤安浩、 桂直美	４．巻 147
２．論文標題 初任期における私立高等学校教師の経験と葛藤のモノグラフ（1）： 第1 回インタビュー調査の分析を通して	５．発行年 2020年
３．雑誌名 東京経済大学『人文自然科学論集』	６．最初と最後の頁 27-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤 安浩、桂直美、高井良 健一	４．巻 40（1）
２．論文標題 初任期における若手教師の経験と成長のモノグラフ(2) ー第2回インタビュー調査の分析を通してー	５．発行年 2018年
３．雑誌名 大分大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 81－96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 桂直美	4．巻 201
2．論文標題 アメリカのスズキ・メソード　ーあるニューヨーク公立学校のスズキ・メソード見聞録ー	5．発行年 2018年
3．雑誌名 SUZUKI METHOD	6．最初と最後の頁 50－53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Naomi Katsura
2．発表標題 Cultivating Expression with a Beginner's Mind
3．学会等名 International Society for the Philosophy of Music Education Oslo, 2023（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 Gakuji Arao
2．発表標題 Irregular but Not Random: A Composer’s Orientation to Japanese Thinking
3．学会等名 International Society for the Philosophy of Music Education Oslo, 2023（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 Naomi Katsura
2．発表標題 How the Aesthetic Education Workshop functions at the Core to Alter the Concept of Evaluation in Prospective Teacher Education
3．学会等名 32nd Japan-U.S. Teacher Education Consortium, 2022.9.26, Niigata University, On Line（国際学会）
4．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

1．著者名 桂直美	4．発行年 2020年
2．出版社 東信堂	5．総ページ数 381
3．書名 芸術に根ざす授業構成論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	荒尾　岳児 (Arao Gakuji) (10378284)	東京音楽大学・音楽学部・准教授 (32646)	
研究分担者	北澤　俊之 (Kitazawa Toshiyuki) (70553741)	東洋大学・文学部・教授 (32663)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	Columbia University Teachers College			